

注文主に応じて字体も色使いもさまざまな書のライブの作品。左端が若山さん



筆字 客の注文で

神恵内出身の書家・若山さん「ライブ」

客の注文に応じ、その場で色紙や衣類に筆字を書き、「書のライブ」。飲食店の看板や食品ラベルのロゴ(意匠文字)を数多く手がける神恵内村出身の書家、若山健一さん(68)が札幌在住。が、「筆字を身近に感じてほしい」と始めて四年になる。余市町のホテル水明閣でこのほど開かれたライブも、目の前で完成した作品に顧客をほころぼせる来場者が相次いだ。(石原宏治)



若山さんの筆で世界に一つの宝物に生まれ変わったTシャツ

「感動しています。来て良かった」—余市町内のトマト農家吉川泰浩さん(38)は長女の名前「咲良」を自分のトレーナーの背に書いてもらった。紺地にインクで白い文字とビシクの花びらが描かれた

作品に「なんか娘が背中め、「ありがとう」を繰り返してみたい。畑で著まり返した吉川さんは、さらにTシャツなど二枚を若山さんに握手を求 追加注文。フクロに目の

目の前で作品 「身近に感じて」



筆運びを真剣な目で迫る来場者

前で書いてもらえぬのが、色紙や衣類ばかりでこんなうれしいこととはなく、服装した台紙を「は」と、すっかりライ 持ち込む人もいた。プにはまったと。 地元実行委の荒木麻美 リウマチを患う余市町 子代表は「私にまで、良内の主婦高橋貞子さん ありがとう」と言ってくれた人がすいぶんいました。筆字と若山さんのラ 抱え、「胸がいっぱいに なりました」と涙ぐんだ。 若山さんは「書の世界の 玄人に要められるより、 多くの人に喜んでいただ ける方がうれしい」と手 応えを感じていた。

午前、午後二時間ずつ のライブには、町内外か 日夜にも同ホテルで書の ライブを開く。次回はジ ャズやブルース、ハワイ アンなどを日本語で歌う グループ「パンパンバサ ール」のコンサートと合 同開催。

お問い合わせは
水明閣 01325・22
2200000

日曜
ふりすむ